

言語イノベーションとしての借用語

—普及学の視点から—

山本 そのこ

要 旨

これまで主に一言語システムの中の語彙・語句の問題として、その意味や歴史を中心に語られてきた言語借用、特に外来語を、ひとつの言語イノベーションとして普及学の立場から捉え、言語学習、言語干渉の視点も加えながら、その採用、普及、屈折などについて考察する。

〔キーワード〕 言語借用 外来語 普及学 異文化間屈折

1. はじめに

今日、英語は世界のほとんどの言語に多大な影響を与えている。もちろん、日本語もその例外ではなく、むしろ英語からの借用語（あるいは外来語）の多さでは、特にここ40年余り目を見張るものがある。しかも、そのいくつかは国際的な共通語となりつつある反面、いくつかは日本語というシステムの中で独自の変化を起こし、日本語を母語としない日本語学習者はもちろん、日本語を母語とする者さえ戸惑わせることが少なくない。日本語における英語の影響については、以前から語彙史・語源学を中心に多くの研究がされてきたし、日本語になった英語外来語と、モデルとされた英語語彙・語句との意味の差については、一般の教養書や英語学習書などにくわしい。しかし、鈴木（1985）が指摘したように、これを言語干渉（「干渉」という言葉が適切かどうかは、また議論の余地があるが）の立場から捉えたものは比較的少ないし、普及学の立場から見たものに至っては、ほとんどない。だが、実際に言語借用という現象を見ると、そこには幼児の第一言語学習から、第二・第三言語学習、二言語併用（バイリンガリズム）とも密接な関係が見られる。また、言語イノベーションとして、その普及と屈折のプロセスに着目することによって、英語が、日本語をはじめとする他の言語に、どのようなプロセスで、どのような影響を与えているかを、社会学的にとらえることも出来る。

本稿では、おもに後者の普及学の立場から、今一度日本語における英語の影響を考察したい。

2. なぜ借用するのか

二つ以上の言語が接触するとき、そこには必ず何らかの変化が起こる。この変化の中で、もっとも典型的なのは、「借用」と呼ばれる言語イノベーションである。もちろん、言語の借用の場合、そこには一般有体物の貸借関係のようなものはなりたない。複数言語使用者の言語干渉やコード

スイッチングに近いものがあるが、ある言語Aを話しながら、他のモデル言語Bの要素を言語Aの中に組み入れ、しかも話者は心理的にあくまでも言語Aのシステム内にとどまっているという点で、コードスイッチングとは異なる。

言語借用には、いくつかのタイプがあるが、それらについては後の項でくわしくのべることにして、ここではまず、借用が起こる原因を、言語学的なもの和社会的なものの両者について見ることにする。

2. 1. 意味の明確化

ある社会システムに、他のシステムから新しい物や概念（イノベーション）が登場したとき、そのいくつかは新しい名称をも採用し、意味の明確化をはかる。その例としては、今日の科学技術分野での用語がある。これについては、モデルとなる英語自身、新語のほとんどをギリシャ・ラテンの古典語の形態素を組み合わせて創り出しているため、同じ要素を既にシステム内に持っているヨーロッパ諸語では、外来語としての意識も希薄であり、比較的容易に受け入れられる。また、このような分野の語彙の多くは、今日では世界各国の専門家のあいだで、共通語彙として通用する。

もうひとつ、同音異義語の存在も、新しい語彙採用への重要な要因となる。この場合、古い概念に新しい名前をつけるという点で、上の場合とは異なるが、同音異義語があるところには、潜在的に新しい名称へ需要があると言っていい。

借用の場合にも、多言語使用者のコードスイッチングの場合と同じく、機能語や人称代名詞はなかなか取り入れられないが、同音異義語が存在するときには、その原則さえ無視されることがある。¹⁾ 日本語の場合、複雑、あるいは抽象的な概念を表す語彙の多くは、従来漢語に頼っていたが、中国語に比べ日本語の音韻要素がかなり少ないため、同音異義語が極端に増えてしまったのは、周知の事実である。²⁾ さいわい漢字は表意文字であるから、読み書き中心の言語生活では、漢語は意味的に透明だった。したがって、音読は難しくとも意味理解の容易な漢語の有利性をあげ、音読は容易でも意味が不透明なカタカナ外来語を「糖衣にくるんだ毒」と読んだ鈴木が発言も、その範囲では妥当なものといえる。しかし、20世紀に入り、視聴覚による情報伝達技術が飛躍的に発達し、日常言語生活における音声言語の割合が非常に増えたために、「聞いてわかる言葉」への移行が必要となってきた。手紙より電話、読書よりテレビ、という生活では、漢語はもはやその透明性を十分に発揮できない。また、英語をいくらかでも理解する日本語話者の人口は増大しており、そのためカタカナ外来語（現在そのほとんどは英語起源）も、必ずしも意味的に不透明とはいき切れない現状である。

2. 2. 意味の曖昧化

これも、あらゆる言語全般に共通することだが、意味を曖昧にするために、わざわざ難解な語や借用語が好まれる分野がある。たとえば、性やタブー、排せつに関する語彙が、それに当たる。ま

た、政治家が用いることばも一部あてはまるだろう。これについては、福本(1980)の、ナチス・ドイツと外来語についての記述がおもしろいので、紹介しておく。福本によれば、ヒットラーがアリア民族の優位性を説き、民族の純粋化政策を推し進めようとしたとき、かれの演説の中には、実に多くの「外来語」が含まれていた。そこで、1933年、ドイツ国語協会は、ヒットラーとかれの党をに対し、Propaganda, Organization, ansieren, など他民族の語彙を使わぬよう訴えた。学者達は国の意向をくんで、言語の純粋化運動を起こそうとしたのだが、実際のところ、政府は発言内容を不明瞭にするためにこそ借用語をふんだんに使っていたのであり、結局政府の外来語使用は、一般の純粋化運動からは除外された。ドイツで外来語排斥運動が勢いを得たのは、純粋化運動を促進していたナチスが崩壊してからのことである。

日本においても、政治家の発言の中に多くの不必要かつ意味不明瞭な借用語が使われることは、たびたび指摘されているし、役所などの公共機関でも、予算獲得のためにカタカナ語を濫用しているのは、モデル言語の持つ高級イメージを売り物にすると同時に、それがいったい何なのか、明確な言及を避ける心理が働くと思われる。

2. 3. 情緒的な語彙

「美しい」、「すばらしい」、「ひどい」、「すごい」などといった語彙も常にもっと強力なインパクトのある語彙を必要としている。新しい語もしばらくすると当初の新鮮さを失ってしまうため、さらに新しい語を求める。広告業界で使われる語彙にもこの傾向がつよく、よく指摘される、アパート、マンション、ハイム、コーポなどの住宅産業用語など、その好例である。

2. 4. 二言語（あるいは多言語）使用者の干渉

今日、多くの情報は英語圏から寄せられる。英語で発せられた言語情報は、各国語に翻訳されるが、情報伝達時間が極端に縮小された結果、「ワシントンに駐在している外国人特派員は、米語の新しい政治用語を耳にすると、それをそのまま自分の報告の中に組み入れる」（Newsweek, 1982年11月15日）ことも余儀なくされている。また、このような事実は、最近特に数を増しつつある、英語を原語とする映画や流行歌の題名の多くが、日本語に訳されずそのままカタカナ書きになっていることにも反映されているようだ。

さらに、比較的にある書物の翻訳の場合でも、図1のように、英語からのものが圧倒的に多く、このような条件のもとで、翻訳者が翻訳の際に英語からの干渉を受けることは、十分に予想される。実際、母語が学習目標言語に与える言語干渉の度合を調べる実験では、口頭による翻訳よりも、紙に書かれた原文を翻訳するときの方が、干渉による間違いが多いという結果も出ている。（デュレイほか、1982）

また、ここで二言語（または多言語）使用者といった場合、それはかならずしも複数の言語使用において同様の能力があることを前提としていない。現在世界中の英語学習者の数は非常に多く、

日本の中等教育に義務づけられている「外国語」は、事実上英語がほとんどである。これらの学習者の英語運用能力は、決して高いとは言えないが、それでも部分的な干渉を受けたり、ある程度の言語借用を行うには十分である。

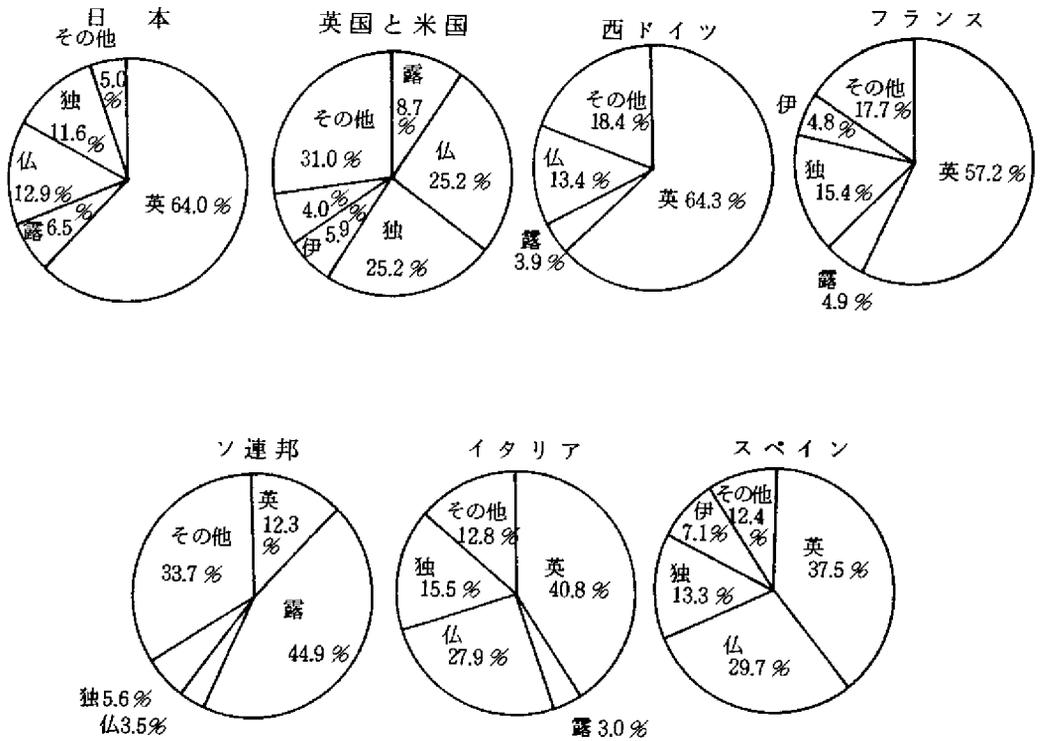


図1 翻訳書の原語 (中井 浩 「国際情報サービスと言語障害」
【情報管理】22-4、1979年)

2. 5. 優位性 (プレスティージ)

古くはフランスの社会学者ガブリエル・タルドが指摘しているとおり、ほとんど全ての模倣行為は、社会的に何らかのプレステージが高いものをモデルにする。これは、言語学習上の目標言語についても言えることだし、言語借用のモデルについても当然あてはまる。

18世紀以降、イギリスは政治・経済の面で非常に優位な立場にあった。もっともこの時期、フランスも依然として優勢で、フランス語は公用語として、また言語借用のモデルとして大きな力を持っていた。しかし、20世紀になり、ヨーロッパ各国が世界大戦のために疲弊すると、アメリカ合衆国が圧倒的な力を持つようになり、政治・経済のみならず文化の面でも、世界に大きな影響力を持つに至っている。

日本人を対象とした世論調査の結果では、日本の一番の友好国としてはつねに米国がトップであ

るし、一般に、アメリカは優れている、いかす、カッコいい、といった意識はかなり広く持たれているようである。これは、荻野ほか（1987）の外来語に対する日本人の意識調査などにも顕著にあらわれている。この調査では、外来語とそれに対応する本来語（和語・漢語）の同義語について、外国人も含めた母語別調査、日本語を母語とする被験者の男女別・年齢別調査を行っている。その結果、イメージ調査では、性別・年齢に関わりなく、本来語よりも外来語の方に「よい」あるいは「どちらかといえばよい」イメージをもっていることがわかった。⁹⁾ 言うまでもなく、この高級イメージは、ファッション界・広告業界をはじめ、政治家、あるいは単に自分の教養をひけらかそうという俗人によって、大いに利用されている。

経済的優位性と言語学習の問題については、J. A. フィッシュマンほか（1977）の研究がある。だいぶ古くなるが、彼らが用いた1974年のデータでは、G N Pを公用語別に分類した場合、英語話者の総G N Pは、世界全体の34.6%で、2位ロシア語の13.2%をかなり引き離している。ちなみにこの時点で、日本語は8.2%で、ドイツ語につづき4位にはいっている（図2参照）。言語学習の方

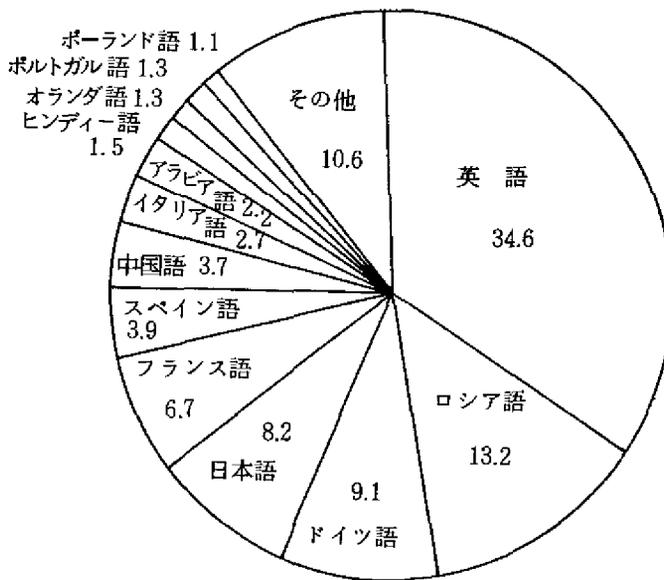


図2 言語とG N P (J.A.Fishman 'The Spread of English)

向性、すなわち売り手と買い手のどちらがどちらの言語を学習しようとするか、を調べた結果では、以前英語国家の植民支配を受けたか否かに関わらず、英語国家への輸出が多い国ほど英語の普及が進んでいることがわかっている。対米輸出に力を注いできた日本で英語学習が盛んになり、英語を公用語とする国家の中では、対日輸出の多いオーストラリアで、まず日本語学習者が増加したこともこの結果と一致している。

このように、英語学習に対しては、総合的（文化を知りたい、友だちになりたい、など）・道具

的（学習すれば、それだけお金が入る、など）動機づけの両者がそろっており、英語をモデルとする言語借用についても共通するものがあると思われる。⁴¹

3. なぜ普及するのか

あるイノベーションがなぜ容易に普及し、他のイノベーションがなぜシステムに受け入れられずに消えていくかも、普及研究のひとつの重要な課題である。ここでは、英語借用語が他の言語、主に日本語でなぜ普及しやすいのかを、E.M.ロジャーズ（1983）の普及学理論、および彼の用語を用いてさらに詳しく検討したい。

3. 1. 相互的イノベーション

あるシステムの中で、何か新しい要素（イノベーション）が現れると、それはコミュニケーションチャンネルを通し、ある時間をかけて、システム内に広がる。ロジャーズは、この(1) イノベーション、(2) コミュニケーションチャンネル、(3) 時間、(4) システムの四つをを、普及の基本要素として挙げている。しかし、最近になって、ロジャーズ自身、第五の要素の存在を認めている。すなわち、もしこのイノベーションが、相互的なものである場合には、普及速度は通常より加速度的に速くなることが認められるのである。

たとえば、ワードプロセッサの普及を例にとってみよう。この新しい機械を一番初めに採用した人も、普及段階の中期、あるいは後期に採用した人も、この機械から得る恩恵に変わりはない。しかし、電話機の場合、一人目の採用者には何の恩恵もない。電話をかける相手がいないからである。二人目の採用者がでて、はじめて電話機の利用価値が出てくるが、それはまだ十分なものとは言えない。二人の間の回線は、固定した一本に限られている。ところが採用者の数が増えるにしたがって、回線の数も等比及数的に増加する。こうして 100人目の採用者は 1人目より、1000人目の採用者は 100人目の採用者よりも、ずっと多くの恩恵を受けることができる。したがって、このような相互作用的な性格を持つイノベーションでは、いったん臨界点を越えると、普及曲線は通常よりも急なS字カーブを描くことになる。⁵¹

新しい言語要素の場合も、この後者のタイプのイノベーションといえる。少なくとも話者がコミュニケーションを目的として新しい語や表現を使う場合には（難解な語を用いることによって、話し手が自分の優位性を誇示したり、聞き手を煙に巻こうとするときは当然事情は異なる。）、その語について、聞き手側にも同様の知識・理解を期待している。もちろん聞き手は、必ずしもその語を知っているとは限らないが、文脈から意味を推測することができるかもしれないし、あるいは話し手が勝手に相手が理解できたと考えたりする。物の普及の場合は、初期採用者には、冒険心とともに経済的余裕が必要となることが多いが、言葉の場合にはそのような制約もないし、また、だれが採用者で、だれが未採用者か、外見ではわからないので、採用者は半ば相手かまわず新しい言語要素を使用し、結果として未採用者にもその言語表現についての知識を与える。このようにして、

いったん普及し始めた言語要素は、時に驚くような速さで流布する可能性を持っている。

3. 2. 相対的有利性

「相対的有利性」というのは、イノベーションがそれ以前に採用されている物やアイデアに比べて、すぐれていると知覚される度合である。ロジャーズによれば、相対的有利性の度合は、経済的収益性の面に現れることが多い。しかし、たとえば不快な労働の削減も、高い有利性として評価されることもあるし（例：除草剤、電化製品など）、効き目のある薬、教育効果の高い教科書なども、有利性が高いといえる。借用語における相対的有利性は、2項であげた意味の明確化・曖昧化・情緒語に置ける表現力の強さ・優位性に見ることができる。

3. 3. 両立性

「両立性」とは、イノベーションが、受け手の価値態度、過去経験、欲求と一致していると知覚される度合のことである。イノベーションが、社会システムの特性と両立性をもつ場合は、普及速度が速まるが、社会システムにとって重要な特性と相いれない場合は、普及速度が落ちたり、不採用になったりする。たとえば、牛を神聖なもののみならずヒンズー教徒の社会に牛肉の食用を普及させることは、不可能に近いし、豚肉の消費は、イスラム教の文化的価値と両立性をもたないので、イスラム教国家では大々的な豚肉料理の採用を期待することはできにくい。

ところで、借用語は日本社会の中で両立性をもっているだろうか。日本は、典型的な島国型（island form）の文化特性をもっている。島国は、外界からの刺激に対して肯定的にしる、否定的にしる、極端な反応に出ることで知られている。否定的な反応の例としては、鎖国があげられるだろう。しかし、いったん肯定的な反応をとり始めると、外界のものを見境なく吸収しだす。同じく典型的な島国型の文化をもつイギリスにも、同様のことが言える。それは、たとえば現代英語の語彙の中にいかに外来の要素が多いかということからもわかるだろう。（この割合は、およそ60で、現代日本語の語彙における外来要素の割合とほぼ一致するのも興味深い。）島国の文化価値観の中には、しばしば「海の向こうからくるのはみんな良いもの」といった意識があり、これは借用語についても高い両立性をもつものである。これとは反対に、大陸型（continent form）の強いフランスや中国の言語では、外来の要素に対して日本語や英語ほどのバイタリティーは見られない。半島型文化の韓国でさえ、借用語は他民族の創造物という意識が強く、その採用は他民族への精神的服従と自らの民族のアイデンティティー喪失と考えられるので、できるだけ使用を避ける、と報告されている（渡辺、1980）。文化的価値が言語借用と両立しない例であろう。

3. 4. 複雑性

「複雑性」とは、イノベーションの理解と使用がむずかしいと知覚される度合のことである。イノベーションの複雑性は普及速度と負の相関関係をもつ。

英語からの借用語の場合、全体として一般人が理解できる度は30年前、50年前と比べれば格段にふえている。難解な語句の借用も増えてはいるが、英語は苦手といいながら、就学率のきわめて高い日本で、最低でも義務教育の3年間は何らかの英語教育を受けている人がほとんどである。したがって、高いレベルでの英語運用能力にはかけても、単語レベルの理解という点では、全体として以前よりは多少容易になってきている（したがって、複雑性が下がりつつある）と言えよう。

3. 5. 同類性と異類性

前述の4項目は、イノベーション自身のもつ特性に関するものだったが、同類性・異類性は、社会システムあるいはシステムの成員の特性に関するものである。

「同類性」とは、相互作用を行っている一組の人間が、互いに信念、価値観、学歴、社会的地位などの属性において似ている度合である。コミュニケーションの基本原則のひとつは、情報の伝達は、似かよった、すなわち同類性の高い送り手と受け手の間で、もっとも頻繁に行われる、ということである。この原則は、たとえば言語の学習にもあてはまる。デュレイほか（1982）によれば、「幼児は、第2言語のモデルとして、教師や両親よりも、遊び仲間や他の幼児を選ぶ、ということが明かである。多くの研究によると、成人も、言語モデルとして、仲間を選びがちである。また、ある研究によると、学習者（幼児も成人も）は、自分が属している人種グループの他のメンバーも、モデルにしがちである。」すなわち、各成員の同類性が高い社会システムでは、コミュニケーションがよりたやすく、情報の伝達や模倣・学習がより円滑に行われることがうかがえる。

日本は単一民族国家だということが言われる。もちろん事実を直視すれば、日本にもアイヌのほか、多数の朝鮮・韓国人、中国華僑などがおり、この発言が真実でないことは明白である。しかし、日本は日本民族による単一国家で、そこに住む者は、「青い目のガイジンさん（彼らはほとんど必ず英語を話す）」をのぞいては、みな日本語を話すというのが、少なくとも1980年代まで、日本社会の暗黙の了解ようになっていた部分がある。事の是非はともかく、社会システムの成員の意識の中では、同類性が非常に高かったといえる。

経済的な国民格差についても、国民の80~90%は中流意識をもっており、その実態のいかんに関わらずかれらは互いにだいたい「同じレベルの」生活をおくっていると意識している。さらに、下層・上流階級にしても、日本の場合、インドのカースト制度の社会階層などとは大きく異なり、他の階層との区別は比較的緩やかで移動も可能である。そのため、他の階層に普及したイノベーション（ピアノ・自動車・住宅の購入、子供に高等教育を受けさせる、など）に対し、「身分不相応」だからと採用をためらうことも少ない。

言語についても、この同類性信仰は根強く、80年代後半になって、外国人居住者が増えたというものの、通りで道を聞くと、「すみません。日本語わかりますか。」などと言う必要を感じる日本人は少ない。同じ日本社会にいる以上、借用語も含め日本語の理解力も同じ程度のはずだ、というのが、なんとなく前提のようにになっている。さらに、高等教育についても、前述のようにみ

なが採用した結果、日本人の就学率は世界中の国々の中でもかなり高い方に位置する。その内容は、自ら認めるように多少画一的な面があるが、そのおかげもあって、文部省で義務づけた中学・高等学校における「外国語」教育は、ほとんど英語一辺倒といってよい。その結果、これらの教育を受けた者は、あまり高いとは言えないが、そこそこの英語力を共通にもっている。この能力は、一般にバイリンガルという語で想起されるような、2言語を同程度に巧みに操るということから程遠いが、ある程度の言語借用を起こすには十分である。ハウゲン（1853）は、次のようにのべている。「（言語借用は、）相手が2言語使用者の場合、いつでも起こりうる。事実、このことは、相手が2言語使用者でなければ、言語借用は考えられなく、また2言語使用者のグループがかなり大きい場合は、明かに言語借用を避けることができない。」

日本において、英語借用語の普及がたやすく、またそれが、ある程度の英語教育を共通して受けたと思われる若年層の間で特に盛んであるという状況も、このような事実を反映している。

反対に、同類性が低く、異類性の高い社会も存在する。たとえばインドやアフリカのいくつかの国家のように、異なる言語をもつ多民族が英語を共通語としているような場合もあるし、教育程度や階層・宗教・経済力が極端に異なる人々がひとつの国家を形成している例も多い。そのような場合には、言語借用や他のイノベーションの普及を含め、情報伝達が同類性の強い特定グループ内部にとどまり、異類性のある他のグループまでとどかない。したがって、全体としてみた場合、イノベーションの採用率も低く押さえられる。

3. 6. コミュニケーション・チャンネル

「コミュニケーション」とは、メッセージが送り手から受け手に伝達されるプロセスであり、「コミュニケーション・チャンネル」とは、メッセージが送り手から受け手に運ばれる手段である。一般に、送り手から受け手への一方的情報伝達としては、マスメディアの力が大きく、イノベーションに対する態度形成などには、個人間チャンネルがより有効だとされている。普及研究では、普及プロセスのどの段階でどのコミュニケーション・チャンネルが使用されたか、ということも、しばしば重要な研究課題となる。

しかし、残念ながら、言語イノベーションの場合には、話者がいつどこでどのようにしてその語句や表現を聞いたかを覚えていては非常に稀だし、また、この話者がイノベーションを試行しているのか、採用してしまったのか、などといったことは、区別がつけがたい。ただ、日本の場合、個人間チャンネルについては、近年都会での人間関係が希薄になっていると指摘されてはいるが、前項に挙げた同類性の高さから、かなり有効なコミュニケーションは期待できる。また、マスメディアもかなり発達しており、多くのテレビ・ラジオ局が24時間放送しているし、国民の間のテレビ・ラジオ受信機の普及率も世帯数に対し100%を超えている。新聞・雑誌の発行部数も伸びる一方であり、これらのメディアが情報とともに、数多くの言語イノベーションについての知識を伝達していることは確かである。

4. 借用タイプと屈折

最初におことわりするが、ここであつかう変化とは、ある社会システムにイノベーションが入ったとき、そのイノベーション自身がいかに変化するかという問題である。イノベーションの採用は、しばしばその社会システム自身にも重大な変化をもたらすが、それについてはイノベーションの「結果」という用語で表すこととする。

新しい社会システムに採用されたイノベーションは、多くの場合何らかの変化を起こす。この変化を、宇野は「異文化間屈折」、ロジャーズは「再発明 (re-invention)」と名付けている。宇野によれば、屈折は削除・添加・置換・融合・修正、その他の過程を通して行われる。本項では、英語の言語要素が、他の言語システムにどのような形で入り、どのような屈折変化を起こすかを主に語彙レベルで考察する。

ただし、言語要素というイノベーションの場合には、表層の個々の形や発音、深層の意味といった要素が混在しているため、小項目としては、借用語・翻訳語・意味借用・創造語といった、比較的古典的な分類を与え、その各々について屈折の様子を見ることとする。

4. 1. 借用語

一番顕著な借用形式である。いわゆる外来語のほとんどがこれに入り、日本語の場合、カタカナ書きにされるので、カタカナ語とも呼ばれるが、最近では単なる強調文字として和語・漢語のカタカナ書きも使われるので、厳密な意味では、カタカナ語=借用語とはいえない。基本的には、表層の音と共に意味も借用される。

まず、音声の面から捉えると、モデル言語の音韻体系と受け手の言語システムの音韻体系が完全に一致することは、まずきわめて稀である。そのため採用された語句は、音的にしばしばモデル言語のシステム内とはかなり異なったかたちで——すなわち屈折して——表出される。第二言語学習における母語の干渉においても、発音上の干渉はいわゆる「外国人なまり」というかたちで、一番最後まで残ることが知られているが、借用語についても、あまりに屈折の度合いが大きく、モデル言語を母語とする者にとって理解不能な音の羅列となることもある。英語を母国語とする日本語学習者にとっても、英語をモデルとする借用語の聴解は、意味の屈折変化と合わせ、予想以上の困難を伴う。

ただし、一定の言語との接触が増えると、時間とともに、発音の修正が行われることがある。そして、このような発音の修正は、ときに受け手言語の音声イノベーション多量採用の結果受け手言語の音韻システムそのものの変化をともなって行われる。また、このような発音修正が、下の例のように、二重語 (ダブルット) を生み出すことも少なくない。

(英) machine →→ (日) ミシン
マシン

(英) stick →→ (日) ステッキ
スティック

借用語の多くは、モデル言語とは異なる言語システムに入ると、意味の上でも屈折変化を起こす。たとえば、特定意味要素の削除や添加は、非常によくみられる現象である。変わった例としては、日本語にフランス語から入った「ヌーボー（とした）」のように、原義とはまったくかわりなく、音感のみから新しい意味が与えられることもある。もちろん、意味についても、モデルと比較した結果、一定の時間を経過してから修正が加えられることもある。たとえば、「パンツ」という語は、若い世代の間では「ズボン」・「スラックス」と同義で使われることがあるが、少し年齢の高い日本語話者の中には、「パンツ」は下着の名称と思われるのでこういう使い方に抵抗がある、という人も少なくない。しかし、これは実のところ、屈折していた意味に修正が加えられたに過ぎないし、もともとこの語彙が日本語に入ってきたときには、下着の上に履くズボンの方を指していたことも記録されている。⁶¹

外国語として日本語を教える場合、このような意味の変化にも注意を払う必要がある。英語、その他のモデル言語との差はもちろん考慮に入れるべきだし、他の言語でも同じ語彙が採用され、しかも異なる屈折変化を起こしているという厄介な場合もある。たとえば、日本語の「プリン」は、卵・牛乳・砂糖を材料とした、フランス語でいうクレーム・キャラメルであるが、フランス語で 'pudding' あるいは 'pouding' いった場合には、小麦粉の入った食べ物となる。それぞれに英語モデルの原義から、何らかの削除が行われた結果である。また、フランス語やドイツ語の話者と日本語の話者が「下着のスリッパ (slip)」といった場合、どちらも下着には違いないが、前者は下ばきを後者は女性用の長めの下着を想起するだろう。もちろん、このような意味の変化や違いをすべての言語のすべての語句について把握ことは不可能である。しかし教師は、ともすれば語のもつ雰囲気や流されたり、どうせ学習者の母語でも同じ形がある、との油断から意味把握が甘くなりがちで、借用語の意味定義やその用法について、少なくとも教えている言語については、しっかりした認識をもっていることが望まれる。

4. 2. 意味借用

日本語には英米系の外来語が氾濫していると指摘される。そして、よく引き合いに出されるのが、外来語に「国をあげて毅然とした態度をとっている」フランス語である。しかし、英語と多くの共通語彙をもつフランス語と、これとはまったく異なる言語系統に属する日本語をこのように単純に比較するのは、不公平というものだろう。

たしかに、日本語に比べ、ヨーロッパ諸語には、一見英語系の外来語が少なく、特に英語と共通語彙の多いフランス語その他のラテン系言語には、その傾向が目立つ。しかし、それは必ずしもこれらの言語が、英語の影響を受けていないということではなく、むしろその影響は、もっと深いと

ころで進んでいる。

筆者は以前、自動車部品 150種の名称について、日・仏・独語の比較を行ったことがあるが、その時問題となったのは、特にフランス語について、英語モデルの翻訳を行ったのか、既存のフランス語語彙の意味拡大を行ったのか、釈然としない例が多かったことである。厳密に言えば、一般に翻訳を行う場合にも、既存の語彙の意味拡大が伴う場合が大いに有り得るとはいえるが、とにかく日本語の場合と比べ、かなり事情が違うことは確かである。

エティアンブル (1973) が、激しいフラングレ批判を行ったときにも、問題とされたのは、単に新しい語句の採用だけでなく、英語の影響による、フランス語システム内の既存の要素の変化であった。ここで作用しているひとつの原則は、モデルの形式が既存の要素の中になくときは、形式ごと採用されるが、既存のシステム内に類似の形式があるときには、これで代用されるということである。これには、言語干渉の問題も密接に関係してくる。つまり、言語干渉の場合、語彙レベルでは、問題となるに言語が互いに似ているほど起こりやすいことが認められているが、これと同じ現象が意味借用についても言える。たとえば、フランス語の'realizer'という語には、「実現する」という意味しかなかったが、英語の影響から、「気が付く」という意味で用いたり、元来「現在は」という意味であるべき'actuellement'が、「実際に」という意味で使われることがあると、エティアンブルは嘆いている。彼の著書には、さらにフランス語前置詞の用法における英語の影響も収録されており、フラングレの場合は、単に外来言語イノベーションの問題でなく、二言語使用者の言語干渉に、より近いことを示している。

日本語の場合、既存の語彙の中に英語の語彙と類似したものを見つけることはむずかしいが、それでも英語以前に採用されていたオランダ語系の借用語彙との間で、いくぶん似た関係がいくつか見いだせる。たとえば、「ソップ」、「ボトル」、「カーズ」などといった語は、それぞれ英語から来た「スープ」、「バター」、「チーズ」に置き換えられたが、英語と形がよく似た「オンス」、「ポンプ」などは、そのまま生き残っている。

4. 3. 翻訳語

モデル言語の語彙や語句を、システム内の既存の語彙・語句で置き換えるという作業は、古くから盛んに行われてきた。日本語でも一昔前までは、翻訳語が幅をきかせていたが、現在では借用語が増えつつあるようだ。翻訳語の利点は、一言で言って意味の透明性ということにつきる。ドイツ語・ロシア語・中国語などでは、本来語による翻訳が盛んであるし、フランス語では本来語による翻訳に加え、ギリシャ・ラテンの形態素を組み合わせる翻訳語（あるいはギリシャ・ラテン語の創造語）も多く創り出している。²¹

ただ、この意味の透明性ということと関連して、翻訳語には、ひとつの欠点がある。既存の言語システム内の要素を用いるということは、しばしばその要素がシステム内でもっている文脈まで取り込んでしまうことになるからだ。

4. 4. 創造語

モデル言語の多数の要素が、システムの中にある程度定着して来ると、その要素を組み合わせた新語の創作が行われる。その中には、モデル言語の規則にしっかりと則ったものもあるが、モデルの規則を逸脱したものも現れる。⁸⁾

日本語のクーラー、ナイターなど、あるいはフランス語の'tennis man' (tennis playerの意) など、モデルの造語規則を侵すものではないが、たまたまモデルである英語に存在しない語である。中には、日本語の「ムーディーな」という語のように、英語にも同型の語があり、しかも意味が異なる場合もある。先にも述べたように、一般の英語教育が進み、潜在的の二言語使用者が増えるにしたがって、創造語はこれからさらに増大する可能性をもっている。

5. おわりに

以上、駆け足で借用語の問題を見てきたが、この言語イノベーションは、現代日本語教育において、教育上の数々の問題を提起するのみでなく、心理学、社会学的にも多くの興味深い問題を抱えている。これまで借用語の問題は、単に言語システムの枠内のみで捉えられることが多かったが、イノベーションの一種としての視点から見ると、他の社会現象とも共通した様々な特徴が明らかになる。

特に、普及を促進する要因としてあげた、イノベーションの相互性・相対的有利性・両立性・複雑性、システムと同類性と異類性、コミュニケーション・チャンネルの特性といった概念は、一般社会現象や言語学習過程の研究結果とも共通する部分が多く、これからさらに詳しい研究が期待される。

元来、普及学は、あるシステム内に技術イノベーションをいかに効果的に普及させるか、という、実学として発展した。新しい穀物の品種を、ある地方の農民にいかに広めるか、とか、ある地域に衛生上のイノベーション（水の煮沸、薬の採用など）をいかに普及させるか、あるいは石斧しか知らない民族にどうしたら鉄の斧を使わせることが出来るか、などといったことが、一番の興味をもって研究されていた。これは、おそらく言語政策の面などに利用できるものだろう。たとえば、ひとつの民族語を、他民族にも普及させるためには、どのような方法が一番効果的か、といった問題にも、普及学は多くの示唆を与えてくれる。また反対に、今回の言語借用の例のような多言語の影響を、できるだけ抑制するためには、フランスのアカデミー・フランセーズのような公的な団体や政府によって、外来語の直接的な使用規制を行うのがいいのか、あるいは借用のモデル言語の相対的有利性（例：就職に有利だ）や、システムと同類性（例：誰もが英語の基礎知識をもつ）を低くした方が効果的なのか、コミュニケーション・チャンネルをどう扱うか、といった問題もまだまだ研究の余地がある。

ところでその後、普及学には、初期のように「普及させれば万事よい」といった、イノベーション普及至上主義への反省が起こった。「未開の原始民族に文明の恩恵を広めてやった」はずが、中

には、その結果、彼らの安定した平和な社会構造自体を根底から揺るがし、破壊するような事例も見られた。そのため、普及学は、単にイノベーションの普及プロセスのみでなく、その普及の結果を重視するべきだ、という考えが生まれてきた。話を言語に戻すと、これまで借用語・外来語という言語イノベーションは、そのイノベーション自身の特性にのみ注目して扱われることが多かった。しかし、日本語のシステム全体に目を移すとそこにも当然変化がみられる。たとえば、現代日本語では、明治時代の日本語などには存在しなかった「ティ」・「ディ」など、いくつかの音が入り入れられつつある。語彙の意味をとっても、本来語の意味の特殊化や消滅がしばしば見られるし、表現形式そのものにも、英語の影響が観察されたりする。⁹⁾ これらの問題も、これから個々に取り上げられるべきである。

また、今回扱わなかった借用タイプとして、混成語や、いわゆる横文字語という、外国語と借用語との中間形もある。両者は今日数を増しつつあり、横文字語については、特に、雑誌の題名や、若者を対象とした雑誌の目次などに目立つが、表記法さえ日本語化するのを諦めてしまったかのようになり、言語の綴り字（主にローマン・アルファベット）のままの、語彙や語句、ときには文さえ採用し、通常の日本語の表記の中に無造作に入れる。この傾向は、1970年代ごろから顕著になっているが、80年代になると、テレビ・ラジオ放送にも類似の現象が起こってくる。特にラジオの場合、若者向けの新しいFM局のいくつかで、二か国語（主に日本語と米語）をちゃんぽんに使った番組を増やしている。これは、当該二言語のどちらの使用者にもわかるように、といった配慮からのものではなく、ひとつのファッション、あるいは隠語的楽しみを込めた言葉遊びに近く、日本語の談話の中に、突然英語の語句を何の発音修正もくわえずに取り込む手法には、横文字語使用と相通じるものがある。

日本語語彙の中に定着している英語借用語の数と言うのは、実はまだ、「外来語の氾濫」といわれるほど多くはない。一般の使用も、むしろ、昭和7年頃のモダン語時代の方が多かったのではないかという調査結果もある。¹⁰⁾ ただ、新語の中では借用語の数が最も多く、また、使用対象には多少偏りが見られる。

本稿では、イノベーションの相互性・相対的有利性・両立性・複雑性、システム（成員）の同類性／異類性、コミュニケーション・チャンネルについてふれただけで、オピニオン・リーダーや、チェンジ・エージェント、採用者やコミュニケーション・チャンネルのコスモポリタ性などといった概念についてはふれなかった。しかし、これらも、言語学習や言語イノベーションの普及を考えたときには、重要な役割を果たしている。今後、この言語イノベーションが、どのようなプロセスを経てどのように普及するか（あるいは普及しないか）、そしてその結果、採用側のシステム全体にどのような変化が現れるか、これらの要素も加えて、さらに観察を続けたい。

注

1) 英語にはつぎのような極端な例がある。古代英語では、人称代名詞'heo'は、現代英語の'she'

と 'they' の二つを表していたが、中世英語になって、音韻変化のため男性単数の 'he' (=現代英語 'he') も発音が同じになってしまった。そのため、3人称複数形に対しては、スカンジナビア語から 'they' を採用したのである。

- 2) たとえば、「コーショール」と発音される語は、交渉、校章、公称など28もある。
- 3) ただし、この調査対象は比較的若年集団の割合が高い。
- 4) その他、言語借用の原因として、宗教によるもの、武力的な征服によるものなどもあるが、現代日本語における英語の影響を考えた場合、これはあまりあてはまらないので、本稿ではくわしく扱わない。
- 5) 横軸に時間、縦軸に採用者数の合計を取った普及曲線は、典型的な場合、学習曲線と同様のS字曲線を描く。ただし、イノベーションの性格によっては、必ずしもきれいなS字にならず、山が二つになったりすることもある。
- 6) 1906年の二葉亭四迷の『其面影』には、「パンツの膝もすりきれて毛がない」、1920年の片山潜の作品『自伝』には「パンツのポケット」という表現が出てくる。
- 7) たとえば、jet plane は avion a reaction, bull-dozer は excavatrice, pipe line は oleoduc, あるいは gazoc と言い換えられる。
- 8) この逸脱のパターンは、往々にして、幼児の第一言語学習や幼児・成人の第二第三言語学習過程で見られる誤りと酷似している。
- 9) たとえば他動詞の多用など。比嘉 (1987) 参照。
- 10) 石野 (1989) 参照。

【文 献】

- 石野 博史 (1989) 「カタカナ語の氾濫」 『言語』第18巻、第6号 大修館書店
- 萩野 綱男 編 (1988) 「日本語語彙の構造——昭和62年度アンケート調査報告」
- 鈴木 孝夫 (1985) 「洋語の現状と将来——言語干渉の視点から」
『日本語学』第4巻、第9号 明治書院
- デュレイ H、バート M、クラッシュン S. (1982) 「第二言語の習得」 弓書房
- 福本 喜之助 (1980) 「ドイツ語史よりみた外来語の研究」 朝日出版社
- 比嘉 正範 (1987) 『英語の影響』 「言語生活 NO430」
- ロジャーズ、E.M. (1971) 宇野善康監訳 「普及学入門」 産業能率大学出版部
- 渡辺 吉箒、鈴木孝夫 (1981) 「朝鮮語のすすめ——日本語からの視点」 講談社
- 国立国語研究所報告20 (1961) 『同音語の研究』、秀英出版
- Etiemble,R. (1964) *Parler-Vous Français?* Paris: Gallimard,1964.
(ed. revue et augmentee, 1973)
- Fishman Joshua A., et al. (1977) "English the World Over: A Factor in the Creation of Bi

lingualism Today."

in *Bilingualism: Psychological, Social, and Educational Implications*, Ed. Hornby, Peter A.

New York: Academic Press, pp.103-139

Haugen, E. (1953) *The Norwegian Language in America*

University of Pennsylvania Press

Rogers, E.V. (1983) *Diffusion of Innovations*, 3rd Edition, The Free Press;

A Division of Macmillan Publishing Co., Inc.

Weinreich, U. (1953) *Language in Contact — Findings and Problems*,

Hague: Mouton